古城

しづや　りふかふ

古城は湖畔に蕭然とたたずんでいた。

虚しく廃墟となって、既に数百年を経ている。
荒廃し尽くし、鎧戸のない窓が髑髏の眼窩を思い起こさせた。

手を入れる者もいないことは、いわれのないことではない。城主の悲劇的な死、幽閉された令嬢が封ぜられた古塔。斬首された幼児の首は未だ見つかっていない。無念の忠臣の殉死、その妻の自害…
季節は既に十一月であった。

どこか懐かしい、秋の寒い空気、雨のしとしと降る晩である。それでも雲が薄いためか、月のあるであろう辺りは朧に明るんでいる。
城の域外の大樹の下、炬火を手に一同は集い、やがて彼らは斜面を登り、崩れた落ちた獅子の門を過っては、狭い敷地へと入るのであろう。

「まだ皆が集まってはいないようだが」
「しかしもう真夜中も近い。そろそろ行かなければ」
「もう少し待っても良いのでは。城内を廻るのに、さほど時間がかかるわけでもあるまいし」
「彼らはまだ夜の街で遊んでいるのさ。行こうよ」

城とは言え、さほど大きなものではない。むしろ辺境の砦と言うべきか。それはただ湖畔の一部の、岬のように少し突き出たところの尖端に、犀のツノのように立つ白い岩を、白い石の城壁で装甲し、その岩の頂上に、ツノの形を延長するかのようにして建てられた城であった。

襟を寄せる。
老大樹は悲しげである。彼らは炬火を掲げて縦列をなし、順次進んだ。

近づくと、岩を溝のように削った狭隘な路を上る。途中に獅子門があらわれる。獅子の像はその首と鬣とが落下していた。
そこを上ると、岩に囲まれた小さなスペース。城砦が見える。その入口も見えた。鉄の板と鉄の大鋲を打った分厚い樫の扉が朽ちて墜ちていた。

そこから入ると、エントランスがあり、エントランスは天井が高く吹き抜けでがらんとしている。周囲を欄干のついた通廊が囲み、こちらを見下ろすかのようであった。
エントランスをゆっくり進み、次の大扉を抜けると、控えの間がある。壁に沿ってならんだ椅子は朽ちて崩れていた。
次は、謁見の間だ。決して広くはない。奥正面にある階の上に、城主の坐がある。両脇には天井から垂らされた長く、暗いくらいに濃い、緋の垂れ幕があって紋章が荘厳されていた。過日の威光を想わせるものの、ほつれもつれた布は無残な、凄まじい姿をさらしている。
この謁見の間の周囲を見下ろすかのように、円柱とアーチがならぶ中二階がぐるりと囲み、アーチの上には、幾何学模様なす石材の透かし彫り（トレーサリー）が無表情に乗っていた。
城主の坐の後にも垂れ幕があり、その奥には城主が威を装い、容を整えたであろう、狭い小部屋があった。
さらにその奥は階段で、城主の居室に続いている。
城主の執務室、その奥が私的なスペースであった。暖炉のある居間があり、天蓋附きの寝室があり、埃まみれの書斎があった。
寝室の天蓋に隠された、ベッドの枕元の奥の部分に、隠し扉があり、それを開けると狭い階段が続く。
それは塔の上へと続く階段であった。らせん状に昇り、たどり着くと、小さな部屋に出た。殺伐として何もない。
ただ窓から月光が差している。
窓から眺めると、雨は止んでいた。
月光が湖を照らしている。

緊張しながら先頭を逝っていた彝之龍肯（いのりょう）と天平龍咒（あまひらりゅうじゅ）は安堵するとともに、非地上的な光景を恍惚として眺めた。
「ここが薄幸の令嬢が幽閉され、その短い生涯を閉じた場所か」
「道行く者がこの窓際に立つ哀しげな女性の姿を見たと言うが」
「ついぞ見なかったな」
「あゝ」
「人助けはできるが、真の意味に於いては、人の運命をどうしてあげることもできない」

その頃、彝之〆裂（いのいれつ）は彼らのわずか十数メートル後、とは言え、未だ塔上へと続く階段を一人、昇っていた。
怖れを知らぬ彼は眉一つ動かさぬも、尖頭を逝く二人は自分より年下なので、さぞかし不安だろうと思いながら、石壁から滲むような、辛みのある黴の匂いに、或る感じを受け続けていた。
「ふふ。

これは…死の匂いだ」

さらに十数メートル後、揺れる炬火で石段を照らしながら、天平普蕭（あまひらふしょう）もまた自らの先を逝く者（〆裂）の後を追うように昇っていたが、らせん階段のため、先逝く者の姿は見えない。まるでこの建築物の中、この闇の中を、独りで歩んでいるかのような錯覚に何度も襲われた。何者かに見られているように感じつつ。

「だが、そんなはずはない」

その十数メートル後、不安げなまなざしで見上げながら、黴の匂いに顔を顰め、階段を数段昇り始めていた天平罸（あまひらあぎと）の十数メートル後で、彝佐早蕨（いささわらび）は寝室の天蓋に隠された、ベッドの枕元の奥の隠し扉をしげしげ眺めていた。

「彼女が閉じ込められていたときには、恐らくこの扉は封ぜられていただろうね。それはともかく、そもそもこの通路は何のためにあったのか」

ちょうどそのとき、寝室に入った炎春慶（ぼのしゅんけい）は十数メートル先、部屋の奥にいる早蕨に声を掛ける。

「あゝ、ここにいたんだ。どうした、もの思いなんかに耽って」

白舟大樂（しらふねたいらく）は寝室の隣の部屋、城主の執務室や書斎があった場所をしみじみ見ていた。何もかも灰色で、物は皆朽ち果て、埃が数センチも積もっている。皮革装丁はボロボロで、羽ペンは羽毛が禿げ、天球儀はネジが脱落し、崩れている。何に使ったのかわからない物もたくさんある。原形をとどめていないせいもあるが、そもそもそれが何なのかわからなそうなものもあった。

「ここで何があって、どんな想いがあったのか、もう正確に推し測ることはできないな」

城主の坐の背後にあった小部屋から続く階段を昇って来た天易ユリイカ（あまやすゆりいか）が大樂を見附けて彼の肩を叩く。

「何してんの？　行くわよ。もう龍肯は塔の上に到着したみたいじゃない」

まるで恐怖などないかのように、彼女の表情はあっけらかんとしていた。

平衛イユノ（ひらえいゆの）は小部屋から昇って来る階段の欄干などを繁文縟礼に飾る彫刻の毀れた残滓を眺めている。寂寥に満ち、

「寂しいわね」

甃璃厭（いしだたみりおん）は城主が威厳を糺したであろう小部屋を見廻し、空想してい

たが、そんなことをしている間に、イユノがさっさと階段へ行ってしまったことに気が附き、慌てて動き出す。
「ちょっと、待って」

そんな璃厭の後姿がちょうど眼に入った彝佐玲央（いされお）は坐の背後の垂れ幕を今まさにまくったところ。そして後ろを振り返って二人の少女に言う、「早く行こうよ、璃厭も、もう階段を上がったよ」

そう声を掛けられた天之韋眞子（あまのいさなこ）と彝佐彝配璃亜（いさいゐりや）は城主の坐に手をかけてしみじみ眺めていた。
「過酷な、凄まじい魂魄、仮借のない闘いの時代を感じる。篝火の焚かれた暗いこの空間で坐する、城主の威厳を感じるわ」
「時の経過が、現世の権威に何か超越的なものを添えているのよ」

そのすぐ傍、炎絵吶韻（ぼのえれいん）と天易初（あまやすうい）は天井から垂らされた、ほつれもつれた垂れ幕を触りながら見上げている。
「荒涼としている。氷原みたいだわ。時が止まったように」
「何だかとても怖い」

二人の数メートル後には、
「見られているような気がするのよね、さっきから」
と言いながら城主の坐へと上がる階を上がりかけている平衛夏音（ひらえかのん）。後ろを振り返った。

そんな彼女と眼が合うのは、白舟来瞳（しらふねくるみ）。彼女は首を振り、
「気のせいよ。
炬火じゃ、この広い広間を照らせなくて、暗闇だらけだから、そう感じるのよ」

その数十メートル後、天平喩吶亜（あまひらゆれあ）と天平伊吶亜（あまひらいれあ）は謁見の間の中央に立ち、腕を伸ばしてなるべく炬火で遠くを照らすようにしながら、周囲の円柱とアーチがならぶ中二階を見廻し、幾何学模様のトレーサリーの憂欝な寂しさに眸を震わせている。
「あゝ、離れちゃうよ、早く、早く、お姉ちゃん」

虚勢を張ってのうのうと歩む炎裂帛汰（ぼのれっぱくた）と甦淋太良（いしだたみながあめたろう）は崩れて開きかけたままの大扉を抜け、控えの間から謁見の間を眺め、その中

央で怯えている喩呬亜と伊呬亜を見た。
「うわ。これは。…やはり、この先に進むのは、少々怖そうだな」
壁に沿ってならび、朽ちて崩れている椅子が不気味さをさらに醸す。炬火で照らされていれば余計にそう感じさせる。
「正直言うとエントランスも凄く怖かったけど、こっちの謁見の間はもう恐怖を越えている。何かいるよ、絶対」

十数メートル後、平衛隆臥（ひらえたかふし）はちょうどエントランスから控えの間に入って来た。
「いや、これは、これは。ますます妖しげだ。あいや、裂帛汰と淋太良が入って行くじゃないか。この先が謁見の間か」
後ろを振り返り、
「さ、真兮くん、早く…あれ？　いない？」

天易真兮（あまやすまことや）はパイプを燻らせ、炬火で照らして周囲を眺めながら、エントランスをゆっくりゆっくり歩く。
「凄まじきかな、暗鬱だ。冷厳なるかな」
そしてどこか楽しそうであった。

その十数メートル後、同源叭羅蜜斗（どうげんぱらみと）は玄関を入り、ポケットに片手を突っ込み歩きながら、天井の高い吹き抜けのがらんとした空間の暗黒と、朧に見える周囲の欄干つきの通廊が自分を見下ろすかのように見えるのを、口をへの字に曲げて薄笑い浮かべ、
「へ、たいしたことねーや」

さらにその数メートル後、天之哥舞伎（あまのかぶき）は入口の樫の扉を見上げながらエントランスに入るところ、
「大したもんだ。時代だなあ。さすがに不気味だな、天井のこの高さ。いや、何とも怖ろしげだ。こりゃ、恐い」

哥舞伎の背を見ながら、濛雨土砂降（けぶさめとさふ）も玄関の階段を上げり、その扉にようやく着いたところ。

その数十メートル後、霧雨蕭々太（きりさめしょうしょうた）は城の前の岩に囲まれたスペースに立ち、

「ここに上がって来ただけで異様だ。あゝ、雨が上がって月が出て来たが、城砦のシルエットが幽霊のようじゃないか」

さらに数十メートル後、驟雨龍仁次（しゅううりゅうじんじ）もようやく上がって来て、この前庭を眺める。

その十数メートル後、霖秋夢弓月（ながあめあきゆめゆみづき）と伊叡敝黙斗（いせべもくと）は未だ狭隘な路を上っていた。
「昔はこんな憂欝な路を、どんな気持ちで上がっていたのか」
「ほんとに不思議なものだ、昔とは」

さらに数十メートル後を天平理人（あまひらりびと）は黙って登っていた。
すぐ後ろにいた白舟是收（しらふねぜしゅう）が振り返って、数十メートル後方の獅子門を眺めると、首と鬣とが落下した獅子の像を天之清覚（あまのきよさと）がしみじみ見ている。
「おおい、早く来いよう」
しかも清覚の数十メートル後には、彝之豪毅（いのごうき）がようやく岩を溝のように削った路に入ったばかり。

遅れてやって来た甃周平敢太（いしだたみしゅうへいかんた）と空鼓斗乎瑠（そらづつみとおる）は悲しげな大樹の下で顔を合わせ、頭を振り向け、路へと消えてゆく豪毅の後姿を眼で捉えた。